



秋の恒例行事

テトラクリスタルアイランド

ソニック達とのテーマパークでの一日を終えて、数ヶ月。
この島ではもうすぐ来る秋に向けての準備をしていた。
白虎達の恒例行事。

「よし、じゃあ行ってくるぜ。」

ピスフリーは身支度を終え、白虎のスタイルで、家族に言った。

「行ってらっしゃい。」

「頑張って来いよ。」

「はい。」

両親に見送られ、ピスフリーは家をあとにした。

この時期になると、白虎達の間では、格闘技の大会が開かれるのだ。

ピスフリーも族長になる前までは、この大会に参加して、上位の成績を収めていたのだ。

だが今年は、族長のため、参加はせず、決勝戦の相手のみの相手をするになっているのだ。

本日はその初日。

ピスフリーはまず、大会の開催を告げるため、夏から秋への移り変わりをしなければならないのだ。

四季の儀式だ。

「ふう、付いた。」

今回はピスフリーが一番乗りで、島の中心の泉の広場へやってきた。

「お、ピスフリー、早いな。」

ピスフリーが付くのとほぼ同時に、空からストレンジャーがやってきた。

「今回は俺が勤める仕事だからな。　なんか早く来ちゃったぜ。」

「まあそれだけやりたかったんだろ？　いいじゃん。」

「あ、いたいたー」

「二人とも早いわねー」

二人が会話をしていると、アルドールとジョイもやってきた。

「よお。」

「毎度の事ながら、やっぱり早いわね。」

ジョイは半分呆れつつ、半分尊敬しつつ、なんともアヤフヤな事を言った。

「皆そろったから、そろそろやるぜ。」

「ああ、頑張れよ。」

ストレンジャーはピスフリーを応援し、ピスフリーは宝石の浮かぶ泉へ足を踏み入れた。

「行くぜ！」

ピスフリーはそういうと、ハンマーを召還し、舞を始めた。

夏のアルドールの時の舞とは違い、元気の出る熱い舞を踊っていた。

しばらく舞を踊っていると、ピスフリーの足元に段々紅葉の葉っぱが出始めた。

ピスフリーがフィナーレをし、踊りを終えるのと同時に、紅葉があたりに撒かれ、吹き飛んでいった。

紅葉が木々の近くを通過すると、木は緑から赤や黄色と、色鮮やかな色へと代わっていった。

ピスフリーは舞を終えると、3人の下へ戻っていった。

「お疲れ様。」

「かっこよかったぜ。」

「男子の舞はやっぱり一味違うわね。」

三人はそれぞれ、ピスフリーへとコメントを言った。

「結構楽しいもんだな、舞って。」

「そういう感想を聞くと、俺も早くやりたいな。」

ピスフリーの感想を聞き、ストレンジャーも舞へ少し興味を持った。

「そういえばピスフリー」

二人の会話の頃合を見て、アルドールは言った。

「確か秋の開始と共に、今年もあれをやるの？」

アルドールはピスフリーへ問いかけた。

「ああ、武道大会だろ？ 毎年の恒例行事だからな。 もちろんあるぜ。」

「じゃあ今年も見に行っていていい？」

「あ、私も行きたい！」

「俺もいいか？」

三人はピスフリーへ頼んだ。

「いいぜ、今年は皆族長だからな、何も言われずに観戦できるぜ。」

「やった！ 今年は堂々と見れるのね☆」

ジョイは前までのことをすべて水に流し、言った。

「じゃあこれから行ってもいいか？」

ストレンジャーはピスフリーに行った。

「いいぜ、行こう！」

「イエーイ！」

三人はそういうと、全員で西側のエリアへ向かっていった。

4人が西側のエリアへ行くと、西側のエリアは、お祭り風景が広がっていた。

「うわあー やっぱり毎年の事もあって、このお祭りは最高だわ！」

「今年もすごい試合が楽しめそうですね。」

アルドールとジョイは口々にそういうと、近くの出店に向かって行った。

「やっぱり今年も、にぎやかだな。」

そんな二人を見つつ、ストレンジャーはピスフリーに言った。

「ああ、今年は島が復活して最初の祭りだからな、気合いが違うな。」

二人は会話をしつつ、祭りの中へ足を踏み入れた。

すると、

「あ！ 族長様だ！」

「青龍様もいる！ こんにちはー！」

まだ幼い白虎の子供達が、ピスフリーとストレンジャーの前へやってきた。

「こんにちは、君達もこの大会に出るのか？」

ストレンジャーは地面に片膝を付き、同じくらいの目線で言った。

「ううん。 僕達はまだ出ないんだ。」

「あともう少ししてからじゃないとダメなんだってー」

それぞれ楽しそうだがちょっと残念そうに言った。

「青龍様はどうしたの？」

子供の一人が、ストレンジャーに問いかけた。

「俺は、君たちの族長といっしょに、この大会を見に来たんだよ。」

「そうなんだー」

「じゃあねー」

子供達は一通り用件が済むと、またお祭りの中へと戻っていった。

「ストレンジャーも有名人だな。」

「ピスフリーもな。」

二人は苦笑しつつ、そう言った。

「あ、そうだストレンジャー」

ピスフリーはふと思い出し、ストレンジャーに問いかけた。

「なんだ？」

「明日の午後、ちょっと時間をもらいたいんだが、いいか？」

ピスフリーはストレンジャーに頼みを言った。

「ああ、あれか？ 別にいいぜ。でもそれを言ってきたって事は、多少参加したいんだな。この大会に。」

ストレンジャーはOKを出しつつ、そう言った。

「まあな。まだ俺だって子供だし、もっとたくさん手合わせしたかったさ。」

「でも族長になった今だと、そういうのは控えなきゃいけないからな。ま、俺でよければ、いつでもいいぜ。」

「ありがとう、ストレンジャー」

ピスフリーはストレンジャーにそう言った。

「二人とも、何を話してたの？」

アルドールとジョイが出店から戻ってきた。

手にはお祭りを楽しんでいる証拠なのか、それぞれ綿雨とジュースが握られていた。

「いや、なんでもないよ。」

「そろそろ行こうぜ、開会式が始まっちゃうからな。」

「OKー」

4人は一時、大会の会場へと向かっていった。

その様子を別の場所に生えている木から見ている人影が。

「この島にも、強者がいそうだな。」

人影は呟く感じにそう言った。

「さて、今度は誰と出来るかな。」

そういうと、人影は一回木を降りていった。

ー続くー

口笛吹き豹

テトラクリスタルアイランド

島では初秋が始まり、西側のエリアでは壮大なお祭りが始まろうとしていた。その火蓋を切って落とすのが初秋最初のピスフリーの仕事だった。

「皆さん、正々堂々、勝利を勝ち取ってください！」

ピスフリーが大会の開幕を告げ、ステージから降りてきた。

「お疲れ様、これからいよいよ始まるのね。」

「今回も熱い戦いが見れるのね！」

アルドールとジョイは楽しそうに言った。

「じゃあ俺たちも見に行こうぜ。」

「そうだな。」

4人の族長達は、特別に作られた族長専用の観戦場所へそこはステージのすぐそばで、近くで迫力のある戦いが見られるのだ。

「うわー！ 早速やってるやってる！」

ジョイは一番乗りで行くと、一回戦の戦いを見始めた。戦いはヒートアップしており、ステージでは熱い戦いが繰り広げられていた。

「やっぱり近くで見ると迫力が違うな！」

「がんばってー」

アルドールは戦っている白虎へ応援の声をかけた。

そしてそんな熱い戦いは一通り終わり、一回戦がすべて終了した。

その頃には夕方になっており、会場は一回静かな空気に包まれる。

「二回戦は明日からだよね。」

「ああ、そのあとが準決勝、決勝だな。」

4人は一回、ピスフリーの家へ向かっていた。

「じゃあ一番面白いのは明後日ね。」

「そういうことだな。」

会話をしていると、あっという間にピスフリーの家へ付いた。

「じゃあな。」

「おやすみなさい。」

「じゃーねー」

アルドールはジョイを持つと、空へ飛んで行った。

「じゃあ俺も帰るよ。」

「ああ、明日はよろしくな。」

「こちらこそ、おやすみ。」

ストレンジャーはピスフリーにそう告げると、翼を広げ、家へと戻って行った。

ピスフリーはストレンジャーが見えなくなると、家へと戻って行った。

ストレンジャーが家へ戻ると、ビリーブが外にいた。

「あ、お帰りなさい、ストレンジャーさん。」

「ただいまビリーブ。 外で何してるんだ？」

ストレンジャーは地面に足をつけ、翼をたたみつつ言った。

「お母様が夕食の仕度を終えたので、「ストレンジャーを呼んできて」って言われたので、待ってました。」

「そうだったのか。 ゴメンな、待たせて。」

「気にしないで下さい。 さっき出てきたばかりなので。」

ビリーブは首を横に振りつつ言った。

「じゃあ家に入ろうぜ。」

「はい。」

「ただいまー」

ストレンジャーはビリーブと共に家へ入っていった。

そして、しばらく時間が過ぎ、夜。

島の住人達はすでに夢の中。

だが一人、おきている人物がいた。

その人物は島の西側よりにある、大きな木の上にいた。

この島の住人では無いが、島に居るのだ。

その人物は一人、口笛を吹いていた。

一見寂しい感じがするが、優しい感じもする、セレナーデを吹いていた。

その人が口笛を吹き終わると、

「全員寝たか。」

そういい、木の上から大きく跳躍し、別の木の上へ。

そこからは西側のエリアが一望でき、個々に家が建っていた。

人影は家を一通り見たあと、また別の木へ。

今度は南側よりの木へ。

そのあと、北側、東側を見ていた。

「まだ見ただけだと、誰が強者かわかんない、か。」

人影はそう呟いた。

「ま、明日になれば、大体わかるかな。」

人影がそういと、雲に隠れていた月が、島に光を照らした。
その人物は、マントをまとった豹だった。

次の日。

朝日が島に差込み、島の住民達は個々で起床し始めていた。

「うーん。」

ストレンジャーも同様に起きていた。
ベットから出ると、窓から外を見た。
本日もいい天気の日和。

「今日もいい天気だな。」

「うーん。」

同様にストレンジャーと同じ部屋の隅っこに寝ていたビリーブも起きた。

「あ、おはようビリーブ。」

「おはようございます、ストレンジャーさん。」

まだ眠いのか目を擦りつつ、ビリーブはそう言った。

「朝ごはん、食べに行こうぜ。」

「はい。」

ストレンジャーは服を身にまとい、ビリーブと共に部屋を出て行った。

本日の予定はコレとって特に無く、朝食を終えたストレンジャーは一人、森の一角にある花畑へ出かけていった。

「今日も綺麗に咲いてるな。」

毎日、この花畑に水をやるのが、ストレンジャーの日課になっていた。

今日も水泡草で水をやっていた。

ストレンジャーが水を上げていると、

ガサッ

「！ 誰だ？」

ストレンジャーは一回水を上げるのを止め、物音のした方を見た。

そこには黒い人影がいたが、すぐに姿を消してしまった。

「・・・」

ストレンジャーは多少考えたあと、水やりに使った如雨露を置き、もと来た方角へ戻っていった。

ストレンジャーが去ると、花畑に先ほどの人影がやってきた。

それは昨晚、口笛を吹いていた豹。

『・・・如雨露か。これは。』

豹はストレンジャーの使っていた如雨露を手に取り、観察し始めた。

『普通の如雨露じゃないな、草と幹だけで出来ている。 生成したものか。』

豹は観察を終えた如雨露を元あった場所に置き、森へと姿を消した。

しばらく時間が過ぎ、お昼。

「じゃあビリーブ、ちょっと出かけてくるからな。」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

ストレンジャーを見送るビリーブを置き、ストレンジャーは泉の庭園へ向かっていった。

泉の庭園

泉に着くと、そこにはすでにピスフリーがいた。

「ピスフリー、遅れてゴメン。」

「ストレンジャー。今着たばかりだから、気にすんなって。」

ストレンジャーは空から地面へ着地し、ピスフリーの元へ。

「こっちが呼び出したことだからな、張本人は早く来ないとな。」

「結構張り切ってるんだな。じゃあ、よろしく頼むぜ。」

ストレンジャーとピスフリーは数歩、間合いを開けた。

「行くぜ！」

「おう！」

二人の組手が始まった。

— 続く —

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

お昼の暖かい日差しが降り注ぐ中、島の中心ではストレンジャーとピスフリーが組手をしていた。
二人は服と武器は身につけておらず、素手で戦っていた。

「破ッ！」

ストレンジャーはピスフリーに空から接近し、流星キックを繰り出した。
ピスフリーはその攻撃を避け、回し蹴りの体制へ。

「はあっ！」

そしてストレンジャーに放った。
ストレンジャーはその攻撃を受け止めた。

「クッ、なかなかやるな、ピスフリー」

「ストレンジャーこそ。」

二人は軽く微笑みつつ、また攻撃を繰り出していった。

二人は小さい頃、初めて出来た、別の種族の友達でもあった。
その頃のストレンジャーは、まだまだ小さい龍で、ピスフリーも同じ位の虎だった。
二人が出会ったのも、この庭園。
冒険半分で来たここで、二人は出会ったのだ。
ピスフリーの耳と額の傷は、その頃からあった。

ストレンジャーと出会う数日前。

ピスフリーは木から転落し、木の枝と葉で、耳と額を切ったのだ。

当時、耳には大きな枝が刺さり、抜き出すにも複雑なため、治療が悩まされていた。

その時、耳を切るかも知れないと、医者から言われたが、もちろんピスフリーは猛反対。

そのため、ピスフリーは自ら、耳に刺さった枝と傷の部分を、自分で切り、自然に治癒させたのだ。

それからは普通に生活できるほどに回復した。

だがもちろん、耳の傷のせいで、同じ種族の子供達から、いじめを受けていたのだ。

その現実から逃げるため、ピスフリーは森の中へ。

そして出た場所が泉の庭園。

そこで、まだ幼かったストレンジャーと、出会ったのだ。

「君、誰？」

ストレンジャーはピスフリーの事を見て、言った。

「僕は、違う場所に住んでる虎だよ。君こそ、誰？」

「僕はストレンジャー、って言うんだ。別の場所に住んでる、龍。」

「龍、ストレンジャー。」

「君、その傷、どうしたの？」

ストレンジャーはピスフリーに近づき、傷の事を言った。

「な、なんでもないよ。」

近づいてきたストレンジャーから目をそらし、ピスフリーは言った。

ピスフリーはもちろん、傷のことでいじめられると思っていた。

だがストレンジャーは

「かっこいいね。」

「え。」

ピスフリーはストレンジャーの言ったことに耳を疑った。

「かっこいい？」

「うん。 傷は確かに痛そうだけど、とってもかっこいいよ。」

ストレンジャーは微笑みながら言った。

ピスフリーは自分に付いた傷を、泉の水で見た。

額には十字、左耳には切れ目が入っていた。

「かっこいいのかな。 こんなのが。」

「君は、そうは思わない？」

「だって、普通じゃないんだもん。 こんな傷。 皆には付いてない。」

ピスフリーは傷を見つつ、ストレンジャーに言った。

「皆には無いんでしょ？ だから個性的で、かっこいいんだよ。」

「個性・・・？」

「あ、そうだ。」

ストレンジャーはその時、首に巻いていたバンダナを解いた。

「これ、付けてみて。」

ストレンジャーはさっきまで自分がしていたバンダナを、ピスフリーの額につけた。

「コレでいいかな。 どう？」

「あ、」

ピスフリーは水面でつけたバンダナを見た。

さっきの自分とは違い、確かにかっこいい感じがした。

「コレだとかっこいい・・・」

「かっこいいでしょ？ 僕はどっちも好きだよ。」

その時、ピスフリーはバンダナをつけた自分が、好きになれたのだ。

「そのバンダナはあげるよ。君の方が似合ってるから。」

「あ、ありがとうストレンジャー……」

「そういえば、君の名前は？」

ストレンジャーはピスフリーに名前を聞いた。

「ピスフリー ピスフリー・ザ・タイガー」

「ピスフリーだね。よろしくね。」

その時、ピスフリーが本当に仲良くなれる友達を見つけたのだ。

そんな過去があり、今があった。

仲がいい友人だからこそ、自分が精一杯力が出せるのだ。

もちろん、相手にケガをさせない程度に。

そしてしばらく組み手をし、夕方。

二人は泉の庭園の芝生に仰向けになっていた。

「はあ、疲れたー」

「やっぱり強いな、ストレンジャー」

二人は別々で仰向けのまま言った。

だが長時間の組み手でさすがに疲れ、二人とも、息が上がっていた。

体には少々、土が付いていた。

「少しは楽しめる戦い方が出来たか？」

ストレンジャーはゆっくり起き上がり、ピスフリーに言った。

「ああ、おかげで楽しかったぜ、ありがとうな。ストレンジャー。」

ピスフリーも同じくゆっくり起き上がり、ストレンジャーを見た。

「もう遅いし、今晚は久しぶりに泊まっていかないか？」

ストレンジャーはピスフリーに提案した。

「いいのか？ スtrenジャー」

「ああ、母さんもビリーブも賛成してくれる。 行こうぜ。」

ストレンジャーは立ち上がり、ピスフリーの手を取り、起き上がらせた。

「じゃあ泊まっていくよ。 ありがとう。」

「こちらこそ。」

ストレンジャーとピスフリーは二人、仲良く家へと向かっていった。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさい、ストレンジャーさん、ピスフリーさん。」

「お帰りなさい、ストレンジャー」

二人が帰ると、母龍とビリーブが出迎えた。

「ピスフリーを泊めたいんだけど、いいかな？」

「もちろん、いいわよ。 じゃあ三人とも、シャワーを浴びてらっしゃい。」

「はい。」

「お世話になります。」

三人はそろってシャワールームへ向かっていった。

しばらく時間が過ぎ、三人が出てきた。

「ふう、気持ちよかった。」

「三人とも、ディナーが出来てるわよ。」

「ありがとうございます。」

三人は席に付いた。

「いただきまーす。」

その後、夕食を済ませ、二人は早めの睡眠を取った。

ビリーブは母龍と共に、食器の片付けをしていた。

そして、島に再び、静かな夜がやってきた。

すると昨日同様に、島のどこかから口笛の音が。

「見つかったな。」

豹は昨日同様、木の上で口笛を吹き終わると、今度は目的地を見つけた様子で向かっていった。

向かった場所は、ストレンジャー達の居る東側のエリア。

豹は近くの木へ移り、とある人物を探していた。

「見つけた。」

豹は一つの家を見つけると、その家の屋根へ乗った。

そして家の窓から部屋を覗いた。

そこにはベットに寝る、ストレンジャーの姿が。

ストレンジャーは今日の組み手で疲れ、深い夢の中。

豹は静かに部屋へ侵入した。

そしてストレンジャーの寝るベットのそばへ。
豹は寝ているストレンジャーを見つつ、右手に刀を召還させた。

そして両手で持ち、ストレンジャーの胸の前に。
ターゲットはもちろん、胸の中の心臓。
ストレンジャーはそのまま、起きる気配が無い。
豹はストレンジャーの心臓を狙い大きく振り下ろそうとした。
だが、

「待ちなさい。」

豹の背後で声。
そこには破魔矢を豹の首筋に当てたビリーブがいた。

「貴方、今何をしようと思いましたか？」

ビリーブはそのままの体制で豹へ問いかけた。

「その方に手出しはさせません。 自分の大切な方ですから。」
「さすがだな、口笛の音色にいつまでも掛かっているわけじゃあないみたいだな。 さすがは狛
犬の一人。」
「僕の事をご存知のようですね。」

ビリーブは豹へ言った。

「とりあえず、刀をしまうから、その矢も消してくれ。」

豹はそう言ったあと、右手に持っていた刀を消した。
ビリーブも矢を下ろした。

「ストレンジャーさんに何の御用なんですか？ 殺そうとするまで。」

ビリーブはまだ豹を警戒しつつ、言った。

「まあ、大した用じゃないさ。 自分の探し物を探しているだけさ。」

豹はビリーブに変わったことを言った。

「探し物？」

「そうだ。 お前や他のやつらじゃダメだ。 そこにいる、ドラゴンに出来そうな探し物だ。」

豹は寝ているストレンジャーを見つつ言った。

「でもそれならどうして、」

「殺そうとしたかってか？ まあちょっとした情報収集、とでも言っておこうか。」

「情報収集・・・？」

「そろそろ起きたらどうだ？ 龍さんよ。」

豹は顔をそらさず、ストレンジャーに言った。

ストレンジャーはそういわれたあと、ベットから体を起こした。

「気付いていたのか。 いつからだ？」

「窓から入ってきたところからさ、 こんな状況下で寝ているはずも無いからな。」

豹は少し後ろへ下がりつつ言った。

「俺に何の用だ？」

「まあそれは、明日になったらわかるさ。 じゃあな。」

豹は窓から外へ出て行った。

「ストレンジャー、大丈夫ですか？」

ビリーブはストレンジャーの胸を見つつ言った。

「ああ、別に傷は無いよ。 心配すんな。」

「そうですか。」

ストレンジャーには特に外傷は無く、ケガはなさそうだ。
ビリーブを安心させ、ストレンジャーはまた、ベットへ横になった。
ビリーブも自分の布団の上へ戻っていった。

『あいつ、何しに来たんだ？ 俺を殺そうとはしていなかったみたいだったが、殺意が無かったから。』

ストレンジャーは先ほどの豹の事を考えつつ、また眠った。

— 続く —

訪問者からの襲撃

テトラクリスタルアイランド

昨晚の出来事を終え、朝日が島に顔を出した。

ストレンジャーは昨日の事をビリーブに口止めをし、朝食を終え、外へ出かけていった。

『昨日の事、なんだったんだ？』

ストレンジャーはそのことを考えつつ、いつもどおりに花へ水をやっていた。

毎日の水遣りのおかげもあり、そこに咲いている花々は綺麗で生き生きしていた。

ストレンジャーはそんな花々を一通り見終わったあと、家へと戻っていった。

「あ、おかえりなさいストレンジャーさん。」

家へ戻ると、外にビリーブがいた。

手には雑巾があり、窓を拭いていたみたいだった。

「窓拭きか？ ビリーブ。」

「はい、ちょっと頼まれたので。」

「そっか、ピスフリーは？」

「先ほど『泉の庭園へ行ってくる』って出かけていきましたよ。」

「わかった、ありがとう。」

ストレンジャーは翼を広げ、泉へ向かって飛んで行った。

泉の庭園へ行くと、そこにはピスフリー達がいた。

「あ、ストレンジャー おはようー」

ストレンジャーを見つけたアルドールが手を振っていた。

「皆、何してるんだ？ こんな所で。」

「特に用はないよ。なんとなくここに来たら、皆がいたの。」

「そういうこと。」

「そうなのか？」

ストレンジャーは皆のやり取りを見つつ言った。

『なんか話が出来すぎてる気がするな。』

ストレンジャーは三人を見つつそう思った。

『気のせいかな？』

すると庭園に風が吹いてきた。

だがその風と共に音色がやってきた。

『！！』

ストレンジャーはその音に聞き覚えがあった。

『まさか！？』

ストレンジャーは辺りを見渡した。

すると一本の木の上に影が。

「口笛？」

「どこで聞こえるんだ？」

ストレンジャーが姿を確認した頃、三人も口笛に気がついた。

「さすがだな、いち早く気がつくなんて。」

いったん口笛が止み、豹がストレンジャー達に言った。

「誰だお前！」

ピスフリーは豹を見つつ言った。

豹はそこから大きく跳び、ストレンジャー達の数メートル先に着地した。

「おはようございます、島の族長様方。」

豹は丁寧に挨拶をした。

「貴方は誰ですか？ この島には私達の種族しかいないはずですが。」

アルドールは豹に問いかけた。

「普通なら入れないのはこの島の特徴だな。 だが、普通じゃなかったら。」

「普通の豹じゃ無いな？ お前。」

ストレンジャーは豹を見つつ言った。

「その通りだ。 俺はお前らのような言い方をすると、『オセ』というものだ。 名前はコレージ。」

「で、その普通じゃないオセが、この島に何の用かしら？」

ジョイはコレージに問いかけた。

「俺が求めているのは、強者だ。 この世界にいる強者と、手合わせしている、それだけだ。」

コレージはストレンジャーを見つつ言った。

「で、この島の一番の強者はお前だ。」

コレージはストレンジャーを指差し、言った。

「なるほど、それで昨夜、家に押しかけたわけか。」

「そういうことだ。 というわけで、よろしいかな？」

コレージはストレンジャーの返答を聞いた。

「俺は別に」

「ちょっと待った。」

ストレンジャーが言うのを遮り、ピスフリーが言った。

「ストレンジャーには悪いが、どうしてストレンジャーが一番の強者なのか、教えてもらえないか？」

「まあ簡単に言えば、すべての面においての強者のことだ。確かに力などの表向きは、お前の方が強いかもしれないが、反対の面ではおまえは強者ではないってことだ。」

「反対の面だと？」

「精神的、肉体的にもバランスがとれ、優秀なのが、お前なんだ。」

コレージはストレンジャーを見つつ言った。

「じゃあ俺がお前に勝てば、俺も強者になるのか？」

「やる気、みたいだな。」

コレージはピスフリーの様子を見て言った。

「まあ小手調べぐらいはいいだろう。かかってきな。」

コレージは右手に刀を召還させ、ピスフリーを誘った。

「なめやがって！」

ピスフリーは手にハンマーを召還し、猛スピードでコレージに襲い掛かった。

「はあ！」

ピスフリーはハンマーを大きく振りかぶり、コレージへ攻撃をした。

だが

「！」

「なるほど、やはり力は相当の物みたいだな。」

コレージはハンマーを空いている左手で受け止めてしまった。

「スピードもパワーもあるが、あまり上手に使いこなせていないな。 ありすぎる能力も難しい。」

コレージは受け止めていたハンマーを払い、ピスフリーの背後へ。

「すまないが、お前には用は無いだ。」

コレージはピスフリーの後首元へ手刀を繰り出し、ピスフリーを倒した。

「！！ ピスフリー！」

アルドールとジョイはうつ伏せで倒れたピスフリーの元へ。

「いっつ・体が・動かない。」

ピスフリーは体を動かそうとしたが、力が入らず、起き上がれなかった。

「ちょっと特殊な打ち方をしたからな、しばらく力が入らないよ。」

コレージはピスフリーの首筋へ刀を当てつつ言った。

「残念だが君は強者では無いからな。 おとなしくしてもらおうか。」

「！」

コレージはピスフリーの首にに刀を振り下ろそうとした。

だが

カンッ！

「さすがにそこまではやらせないぜ。」

ストレンジャーは召還した剣を持ち、コレージの刀を受け止めつつ言った。

「強者では無いものを助けるか、龍。」

「ああ、たとえお前にとって不要なものかもしれないが、俺には大切なモノだ。奪わせるわけには行かない。」

ストレンジャーは刀を振り払い、ピスフリーとコレージの間に立った。

「なるほど、それは確かに俺には無い考え方だな。お前から、何かを得られるかもしれない。行かせてもらうぞ。」

コレージは体制を構え、ストレンジャーの元へ向かっていった。

ストレンジャーも剣を持ち変え、コレージの元へ向かっていった。

「破ッ！」

「ハ！」

刀はそれぞれぶつかり合い、攻撃を無効化した。

「さすがは俺が見込んだ奴だ。バランスが取れているな。」

「お前こそ、普通じゃないのは承知だったが、強いな。」

それぞれ一言いうと、少し下がった。

「確かに強いな、では、本気で行かせてもらうぞ。」

コレージは左手にも刀を召還し、二刀流になった。

ストレンジャーは剣を構えなおし、コレージの元へ向かっていった。

そんな二人のやり取りを、遠くから三人が見守っていた。

「ピスフリー、大丈夫!？」

「ああ、少しだけ力が戻ってきた。痛みも無いよ。」

「ストレンジャー。大丈夫かな。」

ジョイはコレージとほぼ互角の戦いをしているストレンジャーを見つつ言った。

「あいつなら大丈夫だ。強いのは俺らも承知だろ。」

「うん。」

ピスフリーの一言に、二人はうなずいた。

『さすがに強いな。』

ストレンジャーは前方にいるコレージを見つつ思った。

『だけど、殺す気は無いみたいだな。さっきもそうだったが。』

ピスフリーを倒そうとしていた時の事を思い出し、考えていた。

『何かを求めているのか?』

「クッ」

「何を考えているかは知らないが、手加減は出来ないぞ。」

コレージの攻撃を受け止めたストレンジャー

「まあ、それでも行くしかないか。」

「何?」

ストレンジャーはコレージの攻撃を振り払い、コレージの元へ向かっていった。
今までには無い動きで、コレージは少し動揺しつつ受身の態勢へ。

『何のつもりだ？』

「破ッ！」

カンッ！！

ストレンジャーはコレージの受身の態勢を崩し、刀を吹き飛ばした。
吹き飛ばされた二つの刀は、回転しつつ地面に突き刺さった。

「終了だ。 ご満足いただけたかな？」

「・・・ さすがだな。」

ストレンジャーはコレージに刀を向けたまま、言った。

「俺の負けだな。 殺るがいいさ。」

「何を言ってるんだ？」

ストレンジャーは剣を下ろし、吹き飛ばした刀を収集し始めた。

「お前は最初から、俺を倒す気は無いんだろ？ だったら、俺もお前を殺すことなんてしないよ。」

ストレンジャーは回収した刀をコレージへ渡した。

「お前は何かを求めている、それだけだからな。」

コレージは刀を受け取り、しまった。

「確かに、お前は俺には無い何かを持っている、そういうことか。」

「俺には何かはわからないが、お前には大切なものなのかもしれないな。」

ストレンジャーとコレージは握手をした。

「では、しばらく一人で何なのかを考えるとするか。」

コレージはそういうと、大きく跳躍し、森へと姿を消した。

「ストレンジャー」

痺れの取れたピスフリーがストレンジャーの元へ。

「ピスフリー、大丈夫か？」

「ああ、なんとかな。 お前は？」

「俺なら大丈夫だ。 あいつ、ケガをさせる気は無かったみたいだからな。」

ストレンジャーはコレージの消えていった方を見つつ言った。

— 続く —

迷いと決意

テトラクリスタルアイランド

突如ストレンジャー達を襲った謎の豹、コレージ
彼はストレンジャーに戦いを挑み、ストレンジャーが勝利を収めた。
だがその前に戦ったピスフリーは、痺れを体に付けられた。
だが徐々に良くなり、4人はそれぞれ、泉の庭園をあとにした。

「あ、おかえりなさいストレンジャーさん。」

東側のエリアへ戻ってきたストレンジャーを、ビリーブが出迎えた。

「ああ、ただいま。」

「・・・ちょっとお疲れのようですね。何かありましたか？」

ビリーブはストレンジャーの所々切れている服を見て言った。

「昨日のアレの件でちょっとな。」

「ケガは大丈夫でしたか？」

「ああ、服がちょっと切れただけだからな。大丈夫だ。」

ストレンジャーは左肩にある服の結び目を解き、服を脱いだ。
脱いだ服を拾い、服を見た。

「結構切れてるな。母さんに縫ってもらおうか。」

「わかりました。僕からお願いしておきますね。」

「ああ、悪いなビリーブ。」

「いえ。」

ビリーブはストレンジャーから服を受け取った。

「じゃあ俺、ちょっと出かけてくるな。」

「はい、わかりました。どれくらいに戻りますか？」

「とりあえず日が暮れるまでに戻ってくるよ。近くだからな。」

「わかりました。　いってらっしゃいませ。」

ストレンジャーはビリーブにそう伝えると、羽を広げ、空へと飛んで行った。
ビリーブはさっきまでストレンジャーが着ていた服を持って、家へと戻っていった。
分かれたストレンジャーは、泉の庭園へ向かい、ワープゾーンへと入っていった。

一方、家へと戻ってきたピスフリー
ちょうど家は留守で、誰もいなかった。
ピスフリーはいつも寝るときに使っているベッドの上へ乗った。

『表向きは確かにお前の方が強いかもしれないが、反対の面ではおまえは強者ではない。』
『精神的、肉体的に優れているのはストレンジャー、お前のほうだ。』
『反対の面で、俺はまだストレンジャーには勝てないのか。』

ピスフリーは先ほどのコレージの言っていた事を考えていた。
日々のトレーニングで付いた筋肉は、ストレンジャーよりはるかにたくさん付いていた。
だがトレーニングでは鍛えられない心が、ピスフリーはまだ負けているのだ。

『どうしたら、強くなれるのかな・・・』

ピスフリーはそう思いつつ、眠ってしまった。

小さい頃、ストレンジャー達の島は、他の侵略軍の手によって侵略され、ストレンジャー達は島から脱出し、個々で生活をしていた。

ピスフリーが着いた場所は、ストレンジャーとは正反対の西の場所にある小さな島だった。

そこは岩山ばかりで自然の多い名の無い無人島。

ピスフリーはそこで一人、強くなるために日々、トレーニングをしていた。

誰の力も借りることが出来ない状態で、ピスフリーはトレーニングをし、魚を捕り、生活をしていった。

島にいる時は、家族やストレンジャー達がいたため、寂しい思いをせず、昔の生活を送ることが

出来た。

だが、無人島へ一人っきりの時。

とても心細く、夜は涙を流す日々ばかりだった。

だが、希望がピスフリーの近くにはあった。

それは、別れ際にアルドールが分けてくれた『再会の兆し』のパーツと、強く生きるためのきっかけを作ってくれたストレンジャーのバンダナ。

ピスフリーはその二つをずっと、肌身離さず持ち、頑張っていた。

その時、目標も出来たのだ。

『ストレンジャーみたいに、自分も、皆も守れるように、強くなるんだ。』

そして数年の時間が過ぎ、

島の生活にもほとんどなれ、立派な青年になったピスフリー。

額にはあの時くれたバンダナをしっかりとつけ、靴紐には再会の兆しを付け、ピスフリーはまた、一日を過ごそうと思った。

その時、海を渡ってきたジョイと再会を果たした。

ジョイは海の上を歩くことが出来るため、一人海を歩いて皆を探していたのだ。

二人はそのあと、無人島から故郷のテトラクリスタルアイランドを求め、旅を開始した。

あるときは高波に襲われ、あるときは嵐に遭遇し。

そして、テトラクリスタルアイランドを見つけた。

だが二人だけの力では島には入れたものの、敵をすべて倒すことが出来なかった。

そのため、一時森の中で休憩していた二人。

だが二人は捕まってしまい、牢屋へと放り込まれてしまった。

もちろん、脱出を試みたが、もちろん開かず。

放り込まれて数日たった頃。

その場所へとやってきたビリーブが、門番を倒し、二人の安全を確保した。

そこでビリーブはストレンジャー、アルドールをここへと導くため、いろいろと策を立て、実行した。

ストレンジャーとアルドールはその導きを頼りに、島へとやってきた。

そして、再会を果たしたのだ。

しばらく時間が過ぎ、夕方。

ピスフリーは目が覚め、ベットからおきた。

『そうだ、あのときに目標が出来て、今まで頑張ってきたんだっけ。』

ピスフリーは額に付けていたバンダナをはずした。

バンダナは緑と白の斜め模様のシンプルなものだ。

あの時にもらい、いつも付けていたため、所々ほつれていた。

『自分も、ストレンジャーと同じくらい、いや、それ以上になれるようになるんだ。』

ピスフリーは改めて決意し、バンダナをつけ、家を飛び出した。

—続く—

テトラクリスタルアイランド

時間は夕方。

ピスフリーは自分の家を飛び出し、森へと入り、ストレンジャーの家を目指して駆けていた。いつもとは違い、少々早く走っているため、風で舞い上がった枯葉がピスフリーのあとについてく。

そしてしばらく走ると、ストレンジャーの家までやってきた。

ピスフリーは家のドアをノックした。

「はい。」

扉が開き、中からビリーブが出てきた。

「あ、ピスフリー。 どうかしましたか？」

「ストレンジャーにちょっと用があったんだけど、いるか？」

「いえ、ちょっと今出かけてますよ。」

「誰か俺の事を呼んだか？」

二人が玄関で話をしていると、ピスフリーの後ろから声がした。

「あ、お帰りなさいストレンジャー。」

空を飛んで戻ってきたストレンジャーが家へと帰ってきた。

ストレンジャーは地面に足をつけ、二人の元へ。

「ストレンジャー、ちょっと二人で話をしたいんだけど、いいか？」

「ああ、いいぜ。」

「行ってらっしゃいませ。」

二人はビリーブに見送られ、出かけていった。

泉の庭園

二人はその足でいつもの庭園へとやってきた。

「で、急にどうしたんだ？」

服を着ていないストレンジャーはピスフリーへ問いかけた。

「ああ、実はちょっとした頼みごと、かな。」

ピスフリーは頬をかきつつストレンジャーに言った。

「頼みごと？」

「明日の試合、俺が決勝戦の勝者と戦うことになってるだろ？ その試合を見て欲しいんだ。」

ピスフリーはストレンジャーに言った。

「でも何で急に？」

「ちょっとな。俺からも上手く説明できないんだ。」

ピスフリーはストレンジャーに背中を向けたまま言った。

ストレンジャーはそのまま立っているピスフリーを見つつ答えた。

「わかったぜ。明日の試合、頑張ってきて来いよ。」

「ありがとう。」

ストレンジャーがOKを出すと、ピスフリーは振り向きつつ言った。

「あとコレは二人にはナイショでいいか？ お前だけに見て欲しいんだ。」

「わかったぜ。バレないようにするよ。」

ストレンジャーは承諾し、言った。

そのあと二人は別れ、ストレンジャーは家へと帰っていった。

『俺の事、見ていてくれよな。』

ピスフリーはそう思いつつ、家へと戻っていった。

次の日。

ストレンジャーはビリーブに出かけるといい、大会へと向かっていった。

母龍に直してもらった服を着て。

ストレンジャーが西エリアへ向かっていくと、ピスフリーが大会用の特設ステージのそばにいた。

「よう、ちょっと遅くなっちゃったか？」

「いや、ちょうどいいタイミングだったよ。」

ピスフリーも同じく族長の服を身にまとっていた。

もちろん、バンダナも付けていた。

二人が話していると、放送が入った。

『それでは皆さん、お待たせいたしました！ ただいまより、今大会の優勝者と、族長様による特別マッチを始めたいと思います！』

放送と共に、会場からは歓声が湧き上がった。

『まずは赤コーナー 今大会の優勝者の入場です！』

ステージにいる実況者がそういうと、赤コーナーから大柄の白虎の青年が上がってきた。

『そして青コーナー われらの族長にして若き青年。 ピスフリー様の入場です！』

そういうと会場は再び歓声に包まれた。

「いよいよだな。」

「頑張って来いよ。」

「ああ！」

ピスフリーはストレンジャーに見送られ、リングへと上がっていった。

『さて、対決者が揃いましたので、戦いの開始です。』

『レディ！ ファイト！！』

実況者がそういうと、相手の青年がピスフリーめがけて突撃してきた。だがピスフリーはあわてず大きく後ろへ跳躍し、攻撃をかわした。

『さすがは優勝候補だな。 スピードもパワーも申し分ないな。』

ピスフリーはそのまま青コーナーの柱へ降り立ち、相手を見た。相手の青年もピスフリーを見た。

『ストレンジャーのためにも、俺は勝つぜ！！』

ピスフリーはその場から飛び出し、青年の背後へと降り立った。そして前へと回り込み、相手のボディに高速で数発、パンチをした。だがそこまで利いておらず、ダメージは少なそうだ。

『さすがに利かないか、なら！』

ピスフリーは回し蹴りで足払いをし、相手をそのまま空中へ押し上げた。青年はそのまま宙へ飛ばされ、ピスフリーは青年の下へ飛んで行った。

『覚悟！』

そしてそのまま相手を掴み、宙で一回転しつつ、相手をステージへ叩き付けた。

ステージにぶつかると、少々ステージがゆれた。

『おおっと！ 早速決着が付いた！！』

実況者は落とされた青年の下へ。

青年は少々ケガをしており、動けそうに無かった。

『勝者！ 族長様！！』

数分の戦いが終わり、ピスフリーが勝者になった。

「おつかれさま、ピスフリー。」

ステージの近くで試合を見ていたストレンジャーは、ピスフリーに言った。

「どうだった？」

ピスフリーはもらったタオルを肩にかけ、汗を拭きつつ言った。

「かっこよかったぜ、フィニッシュの投げも見事だったしな。」

「よかった。」

ピスフリーはストレンジャーの感想を聞き、一安心。

「そういえばピスフリー。」

大会が終了し、近くのベンチで一息を着いていた二人。

ストレンジャーは隣に座っているピスフリーに言った。

「なんだ？」

「そのバンダナ、ずっとつけてるのか？」

ストレンジャーはピスフリーが額につけているバンダナをみつつ言った。

「ああ、ストレンジャーが最初にくれた品だからな。気に入ってるし。」
「そういえばその頃だったっけ、ピスフリーが元気になったのは。」

ストレンジャーは空を見つつ、昔の事を思い出していた。

「あの時にストレンジャーに会ってなかったら、今の俺はいなかったからな。」
「確かに、そうかもしれないな。」

ストレンジャーは視線を変えずに言った。

「ストレンジャー」
「なんだ？」

ピスフリーに呼ばれ、ストレンジャーはピスフリーの方へ向いた。

「ありがとうな。俺のこと、変えてくれて。」

ピスフリーはちょっとテレながら言った。

「あの時、ストレンジャーに会ってなかったら、俺はずっとあのままだった。でもストレンジャーに会って、それが全て覆されて、今の俺がいる。」

ピスフリーはストレンジャーが見ている中、言い続けた。

「俺、ストレンジャーおかげで今いられるのかもしれない。それに。」

ピスフリーはベンチから立ち上がり、数歩前に歩き、振り向いた。

「ストレンジャーみたいに強くなりたいんだ。俺。」

ピスフリーは言いたかった事をすべて、ストレンジャーに言った。

「ピスフリーは真面目だな。」

ストレンジャー多少苦笑しつつ、ピスフリーの元へ。

「俺なんかが、目標でいいのか？」

「ああ、ストレンジャー以上に強くて、やさしい人、いないからな。」

ピスフリーは真面目にストレンジャーに言った。

「いいぜ。」

「ありがとう。」

ストレンジャーはOKを出した。

「でも、コレだけは俺からの頼み。 ずっと、友達ではいてくれよな。 立場はいっしょだぜ。」

「わかった。」

二人は了承しあい、握手をした。

「じゃあもう少し、この祭りを楽しもうぜ。」

「ああ、楽しもう。」

二人はそれぞれ言うと、仲良くお祭りの中へ戻っていった。

そして、二人の友情はさらに深く、確かなものへと変わったのだった。

—E P I S O D E E N D—